

自然とともに

与那覇モト子

石狩町には丘陵、川、海の豊かな自然、その上、防風林という貴重なグリーンベルトがあります。それらの実情と日頃の体験を紹介しましょう。

丘のあたり

町の北部、五の沢、高岡は、樺戸山地の南裾にあたり百メートル内外の丘陵地域です。トドマツ、カラマツ等の人工林もありますが、ほとんどはエゾイタヤ、シナノキ、ミズナラ、ハリギリ等、たくさんの落葉広葉樹が交ざりあつた自然林で覆われています。春先の林床にはフクジュソウ、カタクリ、ニリンソウ、マイズルソウ、エゾエンゴサク等、また、沢にはミズバシヨウ、ザゼンソウに加えエゾノリュウキンカの黄色が目につきます。

その緑豊かな丘陵を厚田方面、または当別方面に車を走らせると、いきなり人工的な広々と切り開かれたグリーンに出会います。ゴルフ場で、この界限（厚田村、当別町を含む）に七箇所もあります。

沢に下りると花畑に覆いかぶさるよりにタイヤや洗濯機、瓦礫などの大型

ごみの山。思わず目をそむけたくなります。

山菜とりの時期になると大勢の人たちが押し寄せ、タランポ、ウド、ワラビ等手当たり次第にとりまくります。

農家の方は「山菜とりのマナーが悪く、フキでさえ根腐れを起こして少なくなっている」と嘆いています。

河畔の状況

町のほぼ中央を流れる石狩川。石狩大橋の少し上流、右河畔にはヤチハンノキ、ヤチダモ、ヤナギ等の天然林があり、その林床に四五ヘクタールものミズバシヨウが群生していました。平成三年、堤防を二メートル嵩上げするため、五〇メートルにわたり（四ヘクタール）埋め立てる計画を、市民はじめ自然保護関係の先生方の働きで、築堤の工法を変え、どうにか三〇メートル埋め立てにしてみました。根元から切られたヤチハンノキの橙黄色の切り株は血でも流しているようでした。掘り起こされたミズバシヨウは二箇所に分けて移植されましたが、今年は跡形もなく消えてしまいました。

ミズバシヨウ群生地からさらに数百メートル上流、あまり丈のないヤナギが生えているくらいの荒地に、シマアオジがいる場所があります。数年前、広い範囲で河川敷が掘られる工事が始まりました。工事を見ながらシマアオジの住むところはと案じていましたら、

翌年、そこは立派な干潟になりシギ、チドリ、深く掘られたところは池になりカモ類が集まる鳥の楽園に変わりました。工事の手が付けられなかった所には、もちろんシマアオジもいます。イネ、イグサ、カヤツリグサの湿地の植物もどつと入り、三年目の今年は、大分草丈も高くなりました。池には、カモ類に交ざり、ダイサギ、コウノトリ等が観察されたと聞きます。自然の成長には目を見張ります。が、また工事が始まったのです。今度は、そこを埋め立てにかかっています。土質からみて対岸でしゅんせつしているヘドロのようです。自然はどのように対処するのでしょうか。池に近くなった草一つない埋立地に、猟解禁日の催しの看板が立っていました。

海岸の実態

サケ漁で知られる石狩本町地区に、町の中核、町役場がありました。今年十一月、花川地区に移転しました。町役場の抜けた本町地区の過疎化対策として、町は、マリソリゾート、石狩シーサイドパーク構想を打ちたてています。

石狩川河口に灯台があります。明治二十五年に建てられたといいますが、もう、かれこれ百年以上にもなります。その百年間に、灯台から先に幅約五百メートル、長さ約千五百メートルの砂嘴ができました。砂嘴の一部は、昭和



少なくなりつつあるハマボウフウ

五十三年、町自然保護条例により、海浜権物保護地域に指定され、監視人をおき、手厚く保護されてきましたので、五月のイソスミレ、ハマハタザオ等の開花を皮切りに、ハマエンドウ、ハマナス、ハマヒルガオ、カワラマツバ、エゾカワラナデシコ、ハマボウフウ、ウンラン等、九月ごろまで次々に海浜植物が開花します。また、砂嘴の中段に、年々乾燥化してはきましたが、モウセンゴケ等生える湿地があり、とりわけ、七月のノハナショウブの群落は見事です。一方、川側には年々カモガヤ等帰化植物が入り込んできています。その地域をシーサイドパーク構想の一環として公園化することになり、平

成元年、植物調査が始まりました。調査員（私も参加）は、「学習のための施設」ビクターセンターを設けることを提案しました。そして、ビクターセンター資料の準備として、平成二年には、ハマナスの丘公園の植物標本作り、平成三年には花のビデオ撮りをしました。こうして、はまなすの丘公園とビクターセンターは、平成四年オープンしました。管理運営は、提案した人たちが中心になり結成した「友の会」が、町より委託を受け、市民に対する自然情報・展示・観察会およびゴミ拾い等行なってきました。ところが平成五年度は、町の方針が急に変わりビクターセンターはアイスクリーム等を売る休憩所になり、友の会には、ハマナスの丘公園での観察会、花の看板立て、ゴミ拾いのみの委託に変わりました。

石狩湾に面した砂丘（約二〇キロ）は、石狩新港、道路等で切断されていますが、海岸草原と、主にカシワからなる大規模な海岸林が続いています。海に垂直に海岸林を横断している北三線道路から、砂丘を観察すると、海側の第一砂丘には、コウボウムギ、ハマニンニク群落、ついでハマナス、ハマエンドウ群落等、小高い第二砂丘の影には地を這うようなカシワが、内陸部に行くに従い、次第に高さを増しながら広がり、それにエゾイタヤ、アズキナシ、ハリギリ等、落葉広葉樹が交ざ

り加わっていく様子が手に取るようにわかります。

海岸線に沿って続く海岸草原を、私は密かに、石狩の原生花園と呼んでいます。特に、エゾカワラナデシコの開花期には、丘が桃紫色に染まります。また、世界一と言われるエゾアカヤマアリのコロニーもここにありますが。

しかし、近年、牧草がすごい勢いで増えてきています。また、オフロード車が走り回り、砂の露出した道が何本も出来ています。今年、カシワ林の東側が切られ、大きな道が通り、フェンスが張り巡らされました。私有地だそうです。他にも、樹海のなかに資材置場がありました。

内陸部あれこれ

明治二十六年北海道庁が、花畔原野等を調査測量し、貸し付け地の許可をはかった時、防風林として残された天然林が、今も、縦横、斜めの防風保安林として多数残っています。どの防風林も余り人手が入らず、原野だったところを忍ばせません。先人の知恵と行為に敬意を表します。その他、縄文時代の土器や石器が発見されたもみじ山砂丘名残の緑地や、石狩湾新港建設で、海岸防風林が切断された風よけとして、十七年前、内陸部側に平行して植えられた新しいヤナギ類の防風林もこんもりと茂っています。私の住む住宅地、花川地区にも南、北二本の天然防風林

があり、春のオオバナノエンレイソウ、秋の紅葉、冬の野鳥等、身近な自然として住民に親しまれています。

この防風林は、保安林として団地造成時にも残されましたし、数年前、北防風林のヤチダモが大量に切られたときや、町に商店街から払下の陳情書が出された時にも住民によって守られました。

おわりに

石狩町にはまだまだ自然が残っていますが、たえず努力をし続けなければ、いつ何時壊されるかわかりません。所在は書けませんが、今年、天然のホタルを見付けました。所在を書けない理由は、人に知られ荒らされてしまった地域二箇所からのアドバイスです。ホタル愛好家が、自分の地域に移植しようと餌になるカワニナごと持って行くのだそうです。住民一人一人の自然に対する認識が大切です。自然について、環境について、まだ無関心、あるいはあたりまえだと思っている人達に、すこしでも関心を持ってもらい、自己本位の人達には自覚を促したく思います。考えは地球規模で、実行は足元からと言われているように、大きな視野にたつて、しかし、家庭のなかから、地域のなかから地道に実行していく仲間を増やしたいと思えます。

(自然観察指導員 石狩町在住)

